



Title	序文：オンラインを用いた科学技術コミュニケーション
Author(s)	種村, 剛
Citation	科学技術コミュニケーション, 29, 3-4
Issue Date	2021-08
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/82482
Type	bulletin (editorial)
File Information	JJSC29_003-004_TanemuraT.pdf



[Instructions for use](#)

小特集 1

オンラインを用いた科学技術コミュニケーション

1. 小特集「オンラインを用いた科学技術コミュニケーション」の背景と目的

2020年に世界を見舞った新型コロナウイルス感染症の大規模流行は、2021年6月の段階で未だ収束の気配を見せない。このような状況下において、大学教育や研究の現場は「否応なく」オンライン化を迫られることになった。それは、科学技術コミュニケーションの実践においても例外ではなかった。「サイエンスカフェ元年」として2005年が挙がるのであれば、15年後の2020年は「オンラインサイエンスイベント元年」ともいえるのではないだろうか。

そこで、本誌では、2020年度に行われた、様々なオンラインによる科学技術コミュニケーションを事例にし、オンラインによるコミュニケーションのメリットやデメリット、サイエンスイベントの実施のための工夫についての知見などをまとめ、共有することを目的とする小特集を組むことにした。

2. 編集過程

この小特集の編集過程を記しておく。今回の小特集は、2020年12月に企画案が出された。編集方針を科学技術コミュニケーション編集部で話し合い、オンラインを用いた科学技術コミュニケーション活動を積極的に行っている5団体の代表に原稿を依頼することにした。依頼先の方々は、編集部から半ば一方的な原稿執筆のお願いに対して、多忙にもかかわらず快く応えていただいた。ここに記して感謝を申し上げる。

また依頼原稿だけではなく、広く一般から原稿を募ることにした。そこで本誌のウェブページで、2021年1月に、小特集のテーマに沿った査読原稿の募集を告知した。同年3月の締め切りまでに投稿された原稿を査読し、1報の掲載に至った。この小特集に関心を持ち、ご自身の活動から得られたオンラインについての知見をまとめてくださった投稿者の方々には、改めて感謝する次第である。

3. 論考の特徴

本小特集に寄せられた計6報の論考は、おおよそ三つのカテゴリに区別することができる。

第一のカテゴリは、サイエンスイベントの企画運営者からの論考である。立花浩司氏「オンライン科学祭の試み～「はこだて国際科学祭2020」の事例報告～」と日下葵氏 他による「サイエンスアゴラ2020のオンライン開催に関する報告」の2報が当てはまる。「はこだて国際科学祭」と「サイエンスアゴラ」は長年にわたり開催され、多くの出展者が参加する、いわばサイエンスイベントの老舗である。この二つのサイエンスイベントは、今回、中止することなく全面的にオンライン実施することに舵を切った。そして例年と遜色のない規模でイベントを完遂したことは特筆に値する。立花報告と日下報告は、オンラインを用いたサイエンスイベントの実践について、複数の出展イベントを統括する企画運営者の立場から記された、貴重な実践報告である。

第二のカテゴリは、サイエンスイベントやオンライン演習の実施者からの論考である。水町衣里氏 他による「新規科学技術をめぐる「オンライン対話の場」の記録」、奥本素子氏 他による「サイエンス・カフェ札幌 | オンライン」の試行～参加者分析から示唆された可能性と課題～」そして中山慎也氏「「かはくVR」を活用した理科教育学演習の試み」の3報がこのカテゴリに相当する。これらの論考は、大阪大学 公共圏における科学技術・教育研究拠点 (STIPS) で行われたオンライン

形式による市民参加型ワークショップ，北海道大学 科学技術コミュニケーション教育研究部門 (CoSTEP) の対話を組み込んだサイエンスカフェ，そして，宮城教育大学で行われたこれまで対面で実施していた施設見学をオンライン実施に変更した演習について記されている。各イベントおよび講義を，オンラインに切り替える際に想定したこと，オンライン実施の際の工夫，そして実施結果が，対面での実施との比較を踏まえ，詳細にまとめられている。

第三のカテゴリは，サイエンスイベントの参加者に視点を置いた考察である。田中香津生氏 他による「対談：中高生宇宙線探究活動「探Q」でのオンライン研究サポート」は，オンラインを用いた研究活動に参加した中高生とそのメンターである大学生の対談がまとめられ，今回の小特集の中でユニークな位置を占めている。そこでは，参加者がオンラインでディスカッションや情報共有する際に感じたことが具体的な実感を伴って記されている。

このように本小特集は，企画運営者・実施者・参加者のそれぞれの立場から，多角的・包括的にオンラインを用いた科学技術コミュニケーションの実践について論じたものになっている。

4. 結語

この新型コロナウイルス感染症が収束したとしても，おそらく科学技術コミュニケーションの実践は，以前のように対面中心のものには戻らないであろう。この状況をむしろ奇貨として，オンラインを用いた科学技術コミュニケーションのスタイルを構築していくことが求められるのではないだろうか。そのためには，実践者の知見の共有が必要である。本小特集がこのような試みに資するものになれば幸いである。

文責：種村 剛 (科学技術コミュニケーション編集長)